

〈令和5年度 第45回ペスタロッヂ祭パネルディスカッション〉
(令和5年3月3日)

これからの筑波教育学を考える

—開学50周年から未来へ向かって—

〈令和5年度 第45回ペスタロッツ祭パネルディスカッション〉

〈令和5年3月3日〉

これからの筑波教育学を考える —開学50周年から未来へ向かって—

宮 寺 晃 夫 (筑波大学名誉教授)
田 中 統 治 (東海大学特任教授, 筑波大学名誉教授)
銀 島 文 (国立教育政策研究所生涯学習政策研究部・部長)
タスタンベコワ・クアニシ (筑波大学准教授)
清 水 美 憲 (筑波大学教授)
平 井 悠 介 (筑波大学准教授)

趣旨説明

清水 本日は、ようこそおいでいただきました。

パネルディスカッション『これからの筑波教育学を考える』を開始します。ご承知のように、本年度は筑波大学が開学50周年を迎え、10月に式典が予定されています。併せて創基151年という記念すべき年になっており、あらためて教育学が筑波大学のフラグシップであるという観点から、筑波教育学とは何か、これからどうあるべきかについて、皆様と考える機会を設定しています。本日は2人で司会を担当します。まず1人は筑波大学の平井悠介先生です。教育哲学研究室に所属しています。もう一人、私は筑波大学の清水美憲です。研究室は数学教育学です。まずこの後に平井先生からパネルディスカッションの趣旨を説明いただき、併せて本日お招きしているパネリストの先生方、指定討論者の先生をご紹介します。パネルディスカッションをスタートします。平井先生、お願いします。

平井 本パネルディスカッションの趣旨を説明します。明治以来の師範学校、東京師範学校、高等師範学校、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学の系譜を受け継ぎながら、現在の筑波大学の教育学があります。ディスカッションのテーマは『これからの筑波教育学を考える』であり、未来を志向する

内容を示しています。未来への志向性は現在の立ち位置から考えることが求められるので、私たちが筑波大学の教育学を巡る現代的状況を理解することが求められます。ただ、「これから」の方向性は現在の状況にいかに対応し、発展すべきなのかという観点からだけでは描ききることはできません。「これまでの筑波教育学」という思考枠組みを参照する必要があると考えます。

「これまでの筑波教育学」とは何かについて、近年の共通のテーマとして議論されたことはなかったと思います。そのため私たちの認識の中には、共通した筑波教育学の像が描かれていないのではないかと、思います。私たちは現に、これまでに、また現在において、筑波教育学に関わってきましたし、関わっています。私たちのなかには、東京教育大学、および筑波大学で継がれてきた教育学を学び、それを学問的・実践的に継承・発展させるという形で筑波教育学をつくってきた人がいます。また東京教育大学、筑波大学において、研究・教育に携わることで、筑波教育学をつくってきた人もいるでしょう。さらに東京教育大学、筑波大学での学び・研究を、日本・海外の各所で展開する形で筑波教育学をつくってきた人もいます。このようにさまざまな諸相をもつ、私たちが関わってきた「これまでの筑波教育学」の共通の像を見据えな

がら、「これからの筑波教育学」を見定めようとするのが、本パネルディスカッションが目指すゴールです。

このような趣旨にかなう登壇者が4人登壇されています。発表順に紹介します。

まずはタスタンベコワ・クアニシ先生です。現在は筑波大学准教授です。クアニシ先生はカザフスタン共和国から本学大学院教育学研究科に入学され、学び、研究されました。現在は比較・国際教育学を専門とする教員として筑波教育学を支える立場ですが、かつて大学院生として筑波教育学を学んだ立場、そして留学生あるいは外国人教員の立場からの考えを盛り込みながら、現在の大学を取り巻く状況を踏まえた発表をしていただけたと思います。

続いて、銀島文先生です。現在、国立教育政策研究所、生涯学習政策研究部部長を務められています。銀島先生も本学大学院に入学されましたが、教育研究科数学教育コースで研究された後、博士課程教育学研究科に入学され、前期・後期課程に所属されました。筑波教育学の研究知見、特に教科教育学における研究知見を学校教育実践や教育政策にどのように生かせるか、筑波教育学に期待されることをこれまでの経歴から、また現在の立場から発表していただけたと思います。

3人目の発表者は田中統治先生です。現在は東海大学特任教授でいらっしゃいますが、筑波大学名誉教授、放送大学名誉教授でもられます。1993年から2015年まで、教育課程学をご専門として筑波教育学を中心的に支えてこられた先生ですが、出身大学が筑波大学とは異なっております。そうしたアウトサイダーの視点を持ちながら、本学在職中にインサイダーとして取り組まれ考えられたことについて、特に附属学校との研究交流の活性化に尽力された経験から、考えられたことについて発表いただけたと思います。

3人の発表者の発表に対して、指定討論者として宮寺晃夫先生に登壇いただいております。宮寺先生は筑波大学名誉教授であられま

す。東京教育大学教育学部教育学科を卒業されたのち、東京教育大学大学院教育学研究科にて研究を重ねられました。1997年から2006年まで、筑波大学教育学系の教員として筑波教育学を、田中先生と同様、中心的に支えてこられました。クアニシ先生も大学院時代に先生から学んだとのことですが、私も宮寺教育哲学を学部時代から大学院生時代まで教えていただきました。東京教育大学における教育学を知る立場から、また筑波教育学を支えてこられた立場から、幅広い観点から発表者に問いかけがなされると思います。

以上、登壇者の先生がたの紹介となります。これからの流れですが、発表者3人の発表を1人当たり20分で行っていただきます。その後、指定討論者から発表者への質問・コメントを15分で行っていただき、休憩を挟んで後半に入ります。発表者の応答を1人当たり10分程度で行っていただいた後、指定討論者による論点整理、論点提示を10分ほどで行っていただき、残り40分ほどでフロアを含めたディスカッションに入ります。それでは、クアニシ先生、発表をお願いいたします。

元留学生・現職外国人女性教員が考える

「これからの筑波教育学」

(タスタンベコワ・クアニシ)

クアニシ タスタンベコワ・クアニシです。このパネルでの話題提供をどのように始めれば良いかいろいろ考えました。実は、この瞬間にこの場で自分がいることについて、正直に言うと、とても不思議な気持ちです。私が2001年に筑波大学に留学してきたときに、いつか筑波大学で自分が教員になることは夢にも思っていませんでした。当初の留学目的は全く違いました。今ここにいるのは自分の努力もあるが、やはり筑波大学の教育学の先生方のおかげです。何よりも私の指導教員だった嶺井明子先生をはじめとして、ここにいる先生方、定年退職されて今はオンライン

で参加してくださっている先生方、そして、同期、後輩、先輩たちのおかげです。皆さんがいたからこそ今の私がついて、この場で筑波教育学域を代表して、『これからの筑波教育学を考える』というとても重大なテーマについて話させていただくことに至っております。このことを本当に光栄に思っており、感無量です。

私からの話題提供に入ります。あまり良いタイトルではないかもしれませんが、私のこれまでの経験や立場を考えて、私が筑波教育学の教員として自分が考える自分の仕事の目的、役割を含めて話します。先ほど平井先生から紹介していただきましたが、簡単にもう少し詳しく自己紹介をさせていただきます。私の専門領域は比較・国際教育学です。研究テーマでは修士論文のときから多言語教育政策です。その中でマイノリティの母語教育保障です。特に自分が旧ソ連出身ということもあり、中央アジア諸国やロシアの教育政策・制度に焦点を当てています。2001年に初めて筑波大学に国費日本語・日本文化研修留学生としてきました。次に2004年に本学の人間総合科学研究科教育基礎学専攻に国費研究留学生として来て、2005年には大学院に入学し、2012年に博士後期課程を修了して帰国しました。2013年には人間系教育学域の教員として採用されて現在に至ります。

最初から断っておきたいですが、私は、筑波教育学を学問として、一つの世界として、過去を振り返り、現在を考え、未来のビジョンを描く立場ではないと自分で認識しています。そのような話は銀島先生と田中先生から、そして宮寺先生から話していただけたと思います。どちらかというと、私は筑波教育学を教育・研究・教員組織の1単位と考えて、自分の留学生としての在籍歴8年と教員歴10年の18年間の経験を踏まえて、これからの筑波教育学の課題だと考えていることについて話します。その課題は三つあると思います。以下、それぞれについてとりあげます。

第一に、私自身が元留学生として考える課

題です。午前中は本学の国際戦略会議に代理出席してきましたが、留学生の受け入れ拡大が本学の喫緊の課題として示されています。これにかかわる筑波教育学の課題としては、優秀な留学生と日本人学生の確保に向けて、筑波教育学の国際的な認知度を上げる必要性があります。

ここで私は次のことを直視することが重要だと思えます。本学の第4期中期目標・計画のKPIとして、令和9年度には年間で留学生を4,500人まで増やすこと目指されていますが、現状は減っているとのこと。教育学類、教育学関連専攻・プログラムでは、留学生数は横ばいしている傾向がありますが、確かではありません。なぜかという、この発表に当たって留学生数の傾向データを調べてみたら、継続的なデータが存在しないということが発覚しました。つまり、年度別・国籍別の所属、研究生・大学院生等の比較可能なデータが存在しません。このことは、教育学類や教育学関連専攻・プログラムでは留学生受け入れを積極的に行ってこなかった、それが課題ではなかったことを表していると思います。しかし、これからは組織評価等で留学生の数が問われます。いかに留学生の受け入れを増やしていくかを考えるときに、私は留学生像の変化が必要だと思えます。私も自分の大学院生時代を振り返ると、自分自身もそうでしたが、母国で日本語学科を卒業している学生が多かったです。日本語能力試験1級を持っている留学生が、教育学関連専攻・プログラムに入る傾向が非常に強く続いています。さらに東アジア諸国出身が多いです。中国と韓国を中心としますが、私は旧ソ連諸国のカザフスタンでした。私の研究室や教育制度学研究室にはまれにロシアやウクライナからの学生が1人ずついました。数年前にコスタリカからの留学生が1人いたと思います。ただし、ここでは外国人教員研修留学生や英語のプログラムを中心としている、国際教育サブプログラムの学生は除いています。要するに、留学生の伝統的なイメージは、日

本語ができる東アジア出身者です。

しかし、これから求められる留学生像は、多様な日本語力をもっている多様な国と地域の出身者である。私たちの頭の中のイメージを変えていく必要があるということです。もちろん修士課程や博士課程では、論文を日本語で書かなければいけないという、筑波教育学が譲らないところがあると思います。私はそれを崩すことを提案しているわけではありませんが、受け入れる学生の対象を変える必要があります。実は非正規学生でも留学生の数を増やすことができるというのが私の提案です。筑波大学には交流協定校が非常に多いです。67カ国、736大学と交流協定を締結しているのです。これを大いに活用できると思います。そこで何がどのように変わっていくのかについてです。まず、教育学類、教育学学位プログラムでは国際教育サブプログラムを除いて、英語で授業を行っていません。そこは正規カリキュラムで受け入れるのではなく、サマースクールやショートステイプログラム等をつくっていけば、留学生の受け入れが可能になると思います。本学の学生にとっても英語のコミュニケーション力の向上、多様な国との交流の場にもなります。あとは午前中の会議でも、日本人学生は留学をしたがらないことは指摘されていますが、私は留学するきっかけにもつながると思います。何よりも重要なことは、ショートステイプログラム等に参加した外国人学生には、日本の教育学、筑波教育学に関心を持ってもらえて、修士課程や後期課程に進学してくれると私は信じています。そのためにはいかにショートステイプログラム等を魅力的なものにするかということです。そうすると日本語にも関心を持ってもらって、日本語で論文を読みたい、日本語で指導を受けたい、日本語で論文を書きたいという意欲を湧き立たせることができます。

もちろん、課題もたくさんあります。日本語ができない留学生の受け入れに対する懸念はあります。先ほど申し上げたように、日本

に来る留学生は日本の原理的な分野である教育学を、日本語で学ぶべきという考えの先生方もいると思います。日本語で教えない教員は孤立してしまうという懸念を持っている先生もいると思います。先生方の心配や懸念事項はごもっともだと思いますが、その中でもどのようにすればそのような学生たちに指導できるかです。あるいは日本語で修士課程や博士後期課程に進学できるように、どのように魅力的な筑波教育学を発信することができるかが課題になると思います。それを教育学域の先生がた全員で共有することが大事です。ただし、準備等の負担が増えることは確実です。私は午前中の会議に代理出席しましたが、とても良いタイミングで出席できました。さまざまな予算が大学にあるようです。例えばショートステイプログラム等に当てられる予算があります。その予算を使って臨時職員等の雇用もできるはずで、いろいろと工夫できると思います。

第二に、魅力的な筑波教育学の発信が必要です。国内では筑波大学は教育学の総本山とよく言われるので、そこまで国内で宣伝しなくてもよいと思いますが、まだ海外に向けた筑波教育学の発信が弱いと思います。その中で筑波教育学としてのメッセージを送ることができる英語出版です。国際的な大手出版社から書籍を出す必要があると思います。既に人間系では進んでいますが、心理学、障害科学と一緒にではなくて、単独で教育学の出版が必要です。そこは後期課程の学生たちの出番があると思います。皆さんも英語図書をたくさん読んでいます。Ph.D. キャンディデートが執筆者の本が結構あります。それは筑波教育学の後期課程の学生にとっても出番のチャンスになります。あとはオンライン開催です。まさに今も活用している Zoom 等で国際的なウェビナー、セミナーについて、筑波教育学だからこそできるものがたくさんあると思います。あるいは既に私たちが行っていて3年目になる、国際的な学生カンファレンスです。私はこれが対面でもできる

と思っています。これらは全て先生方のプレゼンス、国際的な認知度を上げます。何よりも組織、筑波教育学としての国際的なプレゼンスを高めることにつながると思います。

実はこれを話してよいかどうかを迷っていました。今までに私がずっと話していることは、教員の仕事量を増やしてしまうことが一目瞭然です。これらを提案すると、絶対に負担が増えるという答えが返ってきます。では、どうすれば良いか。これは私だけの問題かもしれないと思っていました。私だけがワークライフバランスをとれていないかもしれません。しかし、いろいろな先生と話をしました。今は何が課題なのかということ、研究に没頭できる時間がほしいということです。でも勤務時間内での研究時間の確保は難しいです。例えば、介護しなければいけない家族がいる、小さい子どもがいる、あるいは自分が大きな病気にかかって治療に専念しなければならぬ、そのようにライフイベントがたくさんあります。その中で帰宅してから徹夜で論文を書くことは考えられません。

これからどうすればよいだろうか。私も研究は労働ではないと思います。つまり、研究は、一日8時間の正規な労働時間にしばられるものではないと思います。一方、競争原理に基づいた評価では論文数が勝負になります。このような状況の中で、いかに私たちが自分の時間外労働を見直すかが重要です。評価基準も見直す必要があると思います。ライフイベント等で論文を1本も書くことができなかった年を、どのように評価するかという課題があると思います。

時間が経ってしまいましたが、留学生がなぜ筑波教育学に来るかについてです。例えば、私自身は2004年に大学院にきました。そのときはまだインターネットが発展していない時代なので、筑波大学の教育学はどれくらい素晴らしいというよりは、指導教員の嶺井明子先生の所で研究したくて来ました。でも、嶺井明子先生との出会いも、その前の年に日本語・日本文化研修留学生として来たの

でその出会いがありました。一つのショートステイ等の留学を挟んで来たので、今後もそのような傾向があると思います。

最後に、私が外国人として個人的に学類生から一度言われたのが、外国人先生に日本の教育の何が分かるのかということです。もちろん面と向かって言われていなくて、レポートで書かれていました。外国人である私の役割は何か、考えました。私の役割は日本の教育を相対化できるように情報発信をすることです。また、女性として私は決してロールモデルになれないと思いますが、「優しい」筑波教育学にしていきたいと思っています。これから目指す筑波教育学も多様性やバイタリティーに富んだ、さまざまな背景を持っている留学生や日本人学生が、学びたいと思うような筑波教育学になってほしいです。時間をオーバーしてすみません。ありがとうございました。

平井 クアニシ先生、ありがとうございました。引き続き銀島先生、お願いいたします。

大学院での学びと現在の職務を視座として
(銀島 文)

銀島 本日は20分間お時間をいただいています。「これからの筑波教育学を考える」というテーマをいただき、大学院での学びと現在の職務を視座としてお話をいたします。印刷資料を配っていただいています。発表内容は大きく三つです。最後に若干の考察という流れでお話ししたいと思います。

私が今回の御依頼をいただいたときに、テーマ「これからの筑波教育学を考える」について、私に話す資格があるのだろうか、と思いました。事前のオンライン打ち合わせも一度していただきました。大学院の修士課程と博士課程に在籍して学んだ立場から、いただいた恩恵や学びを振り返ってお話をして、それが何かのお役に立てるのでしたら嬉しく

存じます。筑波大学での勤務経験はありませんので、組織の実情や現在の方針等を理解できておりません。学生の立場から見た一面的なお話ですので、その点をご了承願います。

学部は第一学群自然科学類数学専攻で過ごし、そのあとに数学教育に転向して修士課程教育研究科に進学しました。学問や研究をしたいということは、高校までの進路を決める過程では全く視野に入っていませんでした。そのような方が身近にいなかったことも大きいと思います。中学校あるいは高校の数学教師になりたいと考えていました。私は郷里が宮崎県で、筑波大学で学んで教員免許を取得し、地元に戻って数学教師になりたいという思いで上京しました。当時お世話になった中学校の恩師も、筑波大学を卒業なさって教壇に立ったばかりの先生でした。幸運にも私にとってのロールモデルが身近にいらっしゃいました。筑波大学に進学できれば、良い教師になって地元に戻ることができる、そのようなイメージでした。教員免許取得のため、能田伸彦教授の教育法の講義を取りました。これが数学教育学への第一歩で、私にとっての大切なスタート地点になりました。

あるとき大学内の掲示板で、大学の夏休み期間中に茗荷谷の附属小学校での教育体験に参加するプログラムの案内を見つけました。当時、筑波大学では小学校免許を取得することはできませんでしたが、中学校や高校の教師になるのであれば小学校のことも知っておいたほうがよいだろうと考えて参加しました。参加申込み書に数学教員志望の旨を記入し、算数の先生の教室に配属されました。附属小学校では志水廣先生と坪田耕三先生にお世話になり「算数ワールド」に出会いました。算数の授業は、もちろん私も受けてきましたが、筑波大学附属小学校の算数はとても新鮮で大きな衝撃でした。

学部在学中に専修免許が新設されました（前川 2019）。2年間進学すると専修免許を取得できるということで、親のすねをもう少しかじらせてほしいとお願いして修士課程

に進学しました。これが私にとっての大きな転換点になりました。当時の修士棟には、数学教育コースの院生室の近くに理科教育コースの院生室があり、他の階にも国語教育コースや社会科教育コース、カウンセリングコースの院生室もあったように思います。バラエティーに富んだ領域の院生がすぐ近くに居て、他コースの院生からも大きな影響を受けました。数学教育コースのメンバー構成もバラエティーに富んでいました。現職派遣の院生や内留生もいらっしゃいました。外国人留学生もいらっしゃいました。当時の数学教育コースには、フィリピン、中国、韓国、タイからの留学生が在籍していたように思います。学生にとって大変良い時代でした。時間を気にせず、いつでも気楽に気軽に交流できました。専攻領域を問わずに活発に議論できる学びの環境がありました。

修士課程で論文作成のゼミがあり、能田教授が博士課程院生との合同ゼミを開催してくださいました。そこで初めて博士課程や数学教育学という学問の世界を知りました。もう少し研究してみたいという気持ちが芽生えて、修士課程修了後に博士一貫課程に進学しました。学系棟は修士棟とは別の建物ですが、学系棟でも教授の先生方のみならず、先輩や後輩、違う講座の方々との交流がありました。学系棟でも時間を気にすることなく、院生同士の活発な議論ができ、とてもラッキーな大学院生生活でした。

ちょうどその時期に数学教育の国際会議も主催され、非常に貴重な経験ができました（清水 2021, 能田 1993）。大変濃密な時間を過ごすことができ、感謝しています。学会や研究会を通じて広島大学の教授や院生の方々とも交流がありました。国内の大学の方々、海外の大学の方々との交流や切磋琢磨もあり、今でも続いています。当時は、課程博士を目指す院生は少数で、大先輩の方々が出発ゼミにいらっしゃって論文博士の取得を目指していらっしゃいました。大変のどかな時代でした。

現在は国立教育政策研究所に勤務していますが、一度、異動を経ています。博士課程後期に在学中に、幸いにも金沢大学教育学部に講師として採用されました。先ほど、浜田先生から卒業生や修了生の皆さんへのお言葉の中で、チームとして一緒に頑張っていきましょう、と仰いました。私も同じ気持ちです。皆さんは誇りを持って前途洋々たる将来を思い描いて頑張りたいと思います。私が勤務した金沢大学にも筑波大学に縁のある方々がいらっしやって温かく迎えてくださいました。金沢大学には四高という歴史があり、筑波大学と同じような雰囲気がありました。伝統の重みを大切にしている、親しみを感じる、大変有り難い勤務環境でした。大学では様々な業務も担当できました。教育学部の先生方をはじめ、理学部の先生方や地域の先生方、教育委員会の方々とも多くの親交を得て有意義な10年でした。

その後にご縁をいただき国立教育政策研究所に異動しました。最初の5年間は全国学力・学習状況調査の小学校算数の問題作成と結果分析を担当しました。教育行政を間近で垣間見た初めての機会でした。全国学力・学習状況調査に対しては様々な御意見があり、ときにはご批判をいただくこともあります。私の担当した業務に即して申しあげると、評価問題の作成の奥深さを実感できました。毎年行う調査で、かつ悉皆ですから、それなりに大変なこともあります。調査の立ち上げのメンバーでもありましたので、いろいろな経験と勉強ができました。ベテランの先生方やエキスパートの先生方のお知恵をお借りしてチームで問題作成や分析に取り組みます。それらの先生方の知識や経験は本当に偉大です。「指導と評価」と言われますが、内実は簡単ではありません。指導と評価の関係性、位置づけ方、実際、それらをどのように考えればよいのか、実践すればよいのか、先行研究もありますが、研究課題もたくさん存在する領域だと思っています。

全国学力・学習状況調査を5年間担当した

のち、東北大震災の直後の2011年4月にTIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study, 国際数学・理科教育動向調査) 担当に異動して現在に至ります。

全国学力・学習状況調査は大規模国内学力調査、TIMSSは大規模国際学力調査ということで、類似点も相違点もあります。

2種類の調査の共通点の一つに国際的な関心が挙げられます。全国学力・学習状況調査に対しては、1学年100万人規模の学力調査を毎年実施することに対する驚きの声を海外の方からもいただきます。なぜ英語で発信しないのですか、というコメントも頂戴します。また、TIMSSを介して見える日本の教育に対しても、詳細を知りたいという海外の方からの要望をいただくことがあります。関連文献の多くが日本語なので、知りたい情報にたどり着けないという外国人研究者からの声もいただきます。残念に思うと同時にもどかしさも感じます。言語面での壁があるのは確かだと思います。

共通点の二つ目は、調査設計やデータ分析に関する素養の必要性です。私の修士論文は文献研究と質的研究法を用いたケーススタディーが主でした。調査を設計したりデータ分析や解釈をしたりという勉強をしっかりしてきていませんでした。全国学力・学習状況調査やTIMSSに携わったことで、調査の仕組みやデータ分析法に係る理論と実際をしっかりと学びたいという思いを抱きました。そこで50歳を目前にして社会人課程の大学院に入学し、学ぶことができました。このときにも、幸運にも大学時代の先輩がロールモデルとしていらっしやいました。

ほかにもチームワークや若手育成等の共通トピックが挙げられますが、本日は割愛いたします。

以上、ライフストーリー風にお話しいたしました。筑波教育学を考えるにあたり、5点申しあげたいと思います。

1点目ですが、私にとって教育学はヒトの

成長、学習、教育という営みの追究だと思っています。筑波大学の学部、そして修士課程と博士課程は、他者との出会いと交流の機会でもあり、非常にありがたい学びの環境でした。視野を豊かに広げてくれたように思います。学類ではフレッシュマンセミナーがあり、数学の阿部英一教授、八牧宏美教授、地学の松倉公憲教授にもお世話になりました。大学院では能田伸彦教授をはじめ多くの先生方から学び、附属学校の先生方、同級生、先輩、後輩、留学生、研修生、さまざまな方にお世話になりました。このような学びの環境は、筑波教育学を議論する際の論点になるのではないのでしょうか。

2点目は魅力の発信、強みの認識です。筑波教育学の強みをどのように考えるのかが一つの論点になるように思います。最近の教育界は、全体として活気がない、元気がないように感じます。筑波教育学も同じかもしれません。強みを認識して魅力を発信することも大切ではないでしょうか。

3点目は、大学の役割と責任、教育と研究の捉え方です。大学教員の教育者と研究者の二面性、ステークホルダーの位置付け等も論点に挙げられるように思います。本日、私は卒業生として、ある種のステークホルダーの立場からお話をいたしました。

4点目は、附属学校にも関連して、教育の理論と実践を筑波教育学にどのように位置づけるのかが論点の一つになるように思います。

5点目は、データに関連する論点です。最近ではエビデンスやデータ駆動型等の用語も使われます。この領域の議論や研究が求められています。教育現場や社会、世界は変化しています。悲しいことや信じられないことも起きてしまいます。そのような事象に対して教育は何ができるのか、考えるべきだと思います。さらには、筑波教育学がすべきことについても皆で議論できると良いと思います。

平井 銀島先生、ありがとうございました。最後に田中先生、お願いいたします。

これからの「筑波」教育学を考える：
アウト・インサイダーの視点

(田中 統治)

田中 ご紹介いただいた田中統治です。本日は難問について答えを出さなければいけないという大役を仰せつかっていて、ここ1カ月は夜も眠れないほど悩みました。なぜこれほど筑波教育学についてこの私が考えないといけないのかと、浜田先生を恨みました。「よそ者」の立場からの提案なので気軽に聞いてください。よそ者はベストロッチ祭に参加登録するときに何年の卒業なのかを書く欄があって、さて何と書こうかと迷います。私は筑波大学の出身ではないので、そのような立場で見ると筑波教育学のイメージはどうか。よそ者だから見えること、見えないことがあると思います。

もともと教育社会学を専門にしていた人間です。社会学者にはユダヤ人が多いと言われます。マージナルパーソンというのです。周辺人、境界人の立ち位置にいる人間は、中心に受け入れられない当該社会に対して独特の関心を持つものだ、ピーター・L・バーガーというアメリカの社会学者が書いています。なるほどと思って自分を振り返ってみると、私は小学生のときに転校生としての経験がありました。転校生は3月に皆とお別れて4月から新しい学校で友達をつくらなければなりません。するとこの地域はどのような社会なのかという関心を持って観察する性癖が作られて、次第にフィールドワーカー（現地調査者）的な方面に関心を持ち始めました。

ところで、同じ筑波大学であっても筑波心理学や筑波障害科学とは言われません。なぜ教育学だけ筑波を付けるのかと考えてみると、これは「アイデンティティーの危機」なのです。筑波教育学とは何かという問いを立ててみて、過去を振り返りつつ将来の方向を

探るのは良いことだと思います。でもアイデンティティーの危機は青年期に特有の発達課題です。50歳を迎えた筑波教育学にはふさわしくないかも知れません。最近では中年期の危機と言われる成熟をめぐる課題も指摘されています。私は以前教育社会学に取り組んでいて、学会設立50周年記念シンポで若手会員として「教育社会学のフロンティアを提案せよ」と言われ、そこで述べた論旨が「越境による‘畑荒らし’を目指そう」ということでした。教育社会学の内部にとどまっていたは駄目で、教育の歴史研究、思想研究、教育課程や教育方法等といった外部の領域をもっと開拓できるのではないかと。結局、自分でも教育課程学に出ることにしました。「あの時に言ったとおりにされたね」と言われます。教育社会学とは縁が薄くなったので、今度は筑波教育学のアイデンティティーを考えてみます。

アイデンティティーの規定と言えば、エリクソンのアイデンティティー論の中では縦軸と横軸があります。これについて詳しくは説明しません。筑波大学で考えると創基151年なので、戦前と戦後で75年ぐらいに分けることができます。新構想50年ということで、期間としても半世紀の歴史を刻んできたわけです。ただし筑波大学は新構想大学であったために「脱教育の圧力」はあったと思いますし、今もあります。いつまでも「教育の総本山」ではないという空気です。理工系や医学系等が台頭してきて、伝統的な教育の流れを守る体育系と一緒に頑張ろうというモードでした。筑波教育学はその風圧に耐えつつ何とか生き抜いてきたという印象です。縦軸が「自分史」という時間軸だと考えると、横軸は「いま現在のこの世界の中に私が座るべき椅子があるかどうか」という存在意義を問う軸です。

新構想大学のキャッチフレーズにされたのが学際性と国際性です。これは創基151年の中にも書いてあります。その中で学際性についてはずっとと師範学校のときから学際性を

帯びていたと書いてあって、私はそうなのかなと思ってしまいます。筑波大学が新構想大学として特徴ある学際性という、第一学群、第二学群、第三学群の区分があります。率直に申して変な組み合わせ方だと思います。現在の人間学群というくくりもよく分かりません。英訳を見ると Human Science と書いてありますが、それには大阪大学人間科学部のような社会学や人類学がありません。学際性という横軸の枠内で無理にアイデンティティーを再規定しないとイケなかった。当時の事情があったことを窺わせます。「〇際性」には際（きわ）という字が含まれています。際（きわ）には社会的な意味があってそこを開拓していくことが新構想で期待されたのだと解釈します。そうだとすると、考えられるもう一つの際（きわ）である「実際性」についても考える必要があると思います。実際性について私が体験したエピソードがあるのでそれを紹介したかったのですが、話し始めると時間が足りないの、先に結論を述べます。エピソードは時間があれば質疑の中でお話しします。

ここでいきなり結論に飛びますが、私の提案は何かについて図で説明します。真ん中にあるのが筑波教育学です。これまで下から支えてくれる伝統がありました。伝統を担ってきたのは特定のジェネレーション（世代）です。ジェネレーションは10年もたつと次々と交代していきます。多分10年たつと、ここにいる人たちの大部分がいなくなると思います。学校とはそういう組織体です。世代は10年サイクルで交代する。10年周期説を私は唱えています。自分のライフサイクルも10年に1回見直す方が良いかと。先ほど述べた「〇際性」の軸もそうです。新構想ではここに筑波ありという存在証明として、〇際性があった。国際性と学際性という2軸で筑波教育学の方向性を位置づけてきました。

そこに何らかの窮屈さがあります。50年たつてそろそろもう一つの軸を立てる必要があるというときに、この1カ月で悶々と考え

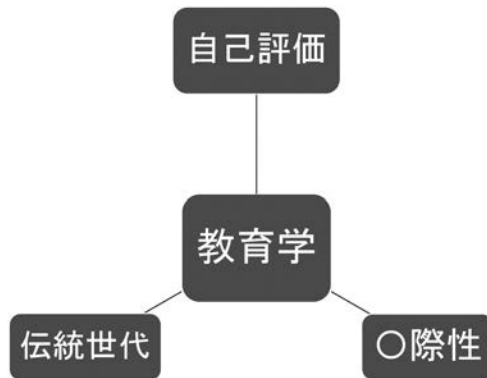


図1：‘筑波’教育学のID規定軸（自己評価軸を）

て出した答えが「自己評価」という軸です。先ほどより提案者の方から強みを出して、元気を出してくださいという銀島さんの話があって、本当にそのような感じでした。ところが周りの評価は非常に厳しいです。浜田先生が書かれた序文の中にも、厳しい環境という言葉が三回ぐらい出てきた気がします。それほどに厳しいのだと大変な気がしますが、しかしここで発想を転換しましょう。他者評価はいろいろとあるかもしれませんが、自己評価で見ると「このようなところはしっかりと取り組んだ、歩みを進めてきている」という軸をつくっていけば、これからの筑波教育学の展望も開けてくるのではないかと思います。このパネルディスカッションはその第1歩としてあります。これから先のことを考えるときに、よそ者はこのようなこと言っていたという感じで受け止めてください。

ここでまた話が飛びます。筑波教育学の方向性を考えるに当たって、これまでの151年の茗溪教育学という一つの伝統をどのように受け継いでいるのかというDNAの問題があります。茗溪教育学は日本が多子時代だった時代、大変羽振りが良かった時代の教育学です。現在の筑波教育学を取り巻く環境は全く違います。私は教育学と呼ばずに「教育研究」と呼べば、環境への間口を広げられるだろうと考えます。超少子高齢化の時代が進行中です。何とかなるだろう、大丈夫、中には開き

直って、何か問題があるのか、結構なことじゃないかと言う論者がいます。でも全く大丈夫ではありません。教育は本当に斜陽産業になってきています。アカデミア書店で見付けたのですが「撤退論」という本が出ています。そろそろ皆さんで撤退しようということの内田樹さんたちが提唱している。やっとなんとか、ついにと言いか、私と同世代から撤退論が提唱され始めたなという時代認識を持ちます。

茗溪教育学は先輩後輩関係、同窓会の力が強いです。茗溪会というと広島大学の尚志会と並んで全国を2分する大きな勢力でしたが、新構想で分断されました。私が東京教育大学出身の先生を紹介するときに、「筑波大学の前身である」と言う、「違う、前身ではありません、前身と言わないでください」ときっぱり言われて、そうなのかという認識を持ったことがあります。そこで茗溪教育学とは縁が切れてしまったところもある。いろいろあったことは聞いています。

縦の先輩後輩の関係ではなくて、斜めの関係を再構築していく必要があると思います。異世代でお互いにサポートし合う関係です。例として『共生と希望の教育学』という本を刊行しました。あと79部残っているので買ってください。できるだけさばいてくださいと筑波大学出版会から言われています。リポジトリを見ると、目次が19回ダウンロードさ

れています。目次を見る人がいるのだなど、逆に励まされました。『共生と希望の教育学』はどのようなものなのかと関心を持ってもらえています。あの本を作り上げたのは「斜めの関係」です。岡本智周先生が中心となって作ったので、私は本当に後押し役でした。筑波大学出版会で谷川彰英先生が代表を務めていて、教育学系で何かをするのであれば後押しすると言っていたので作った本です。ある意味、私の心の中では教育学系の金字塔です。

つまりあのような斜めの関係の中で問題群を共有しつつ、仲間として異世代が共同研究に取り組む、出版に取り組む、あるいはオンラインで発信する、そのような方向性で研究できないだろうかという提案です。そのためには単独研究だけではなくて共同研究のテーマをいつも持つことが大事です。サブテーマを持っておくことが良いです。これまでは主な所属学会でどれだけ専門を極めたか、独自性を発揮したかという狭い範囲で考えてきましたが、研究の世界はもっと広がっています。ある種の網羅性です。今の大学事情のもとで就職という、一つのことしかできないというのではかなり厳しいようです。もう一つサブテーマとしてこれを分担できないか、この科目の一部を担当できないか、そのようなことを頼まれます。そのときに「任せてください」と言えるテーマを持っていれば、生き抜いていける時代を迎えています。

20年以上も前にイギリスの地方大学に客員研究員で行ったとき、教育学部では女性スタッフが非常に多いです。なぜここは女性スタッフばかりなのかをきくと、多くが非正規雇用なのです。巨額の研究費を獲得すれば研究員が増えます。獲得していない部門は増えません。教育哲学や教育社会学は何をしているのかと尋ねると、基礎分野はなくなったと言います。基礎分野以外にもう一つ現代的なテーマがないと生き残っていけないのだそうです。なぜそのようなことになったのかときくと、全てサッチャー政権の頃からだと言わ

れました。日本の大学政策でも新自由主義の考え方が強まっています。その弊害を論じると共にそれをどう生き抜いていくかという現実問題があります。サブテーマを持ってセカンドキャリアというか、第2のキャリアも視野に入れて将来を考えていく必要があると思います。そのために「新しい生涯学習」が求められていますが、研究者の場合は「斜めの研究仲間のネットワーク」を探求してはどうかと思います。

研究所にもさまざまな研究所があります。私が感動したのは、勝手に自分でつくる研究所です。NPOと違い研究所はそれほど複雑ではないので、名刺に何とか研究所と勝手に書いてしまえばいいのです。皆が1人1個の研究所を立ち上げることができます。私も退職したときは「田中教育研究所」にして勝手に所長を名乗ろうかと思っています。そうするととても自由度が高いです。研究しようとするとき、学会で発表するときも、何々大学の何とかと言わなくても、何とか「研究所所長」と言えばいい。これはなかなか良いものです。筑波教育研究についても皆が個人個人で研究所を立ち上げるぐらいの勢いを持ってほしいです。勝手なことを言っている間に時間になりそうです。

筑波教育学のこれまでとこれからについて話します。アウト・インサイダーから見た成果と課題です。外からは「筑波の人たち」と言われますね。私もよく筑波の人たちは…と言われます。筑波人のように思われているようです。そうであれば筑波人になってもよいと思います。ニッチへの着眼、あまり人が手をつけていないところ。それこそ際（きわ）に着眼して開発していくスタンスを大事にしていくことが独自の方向として望ましい。ただ弱みとしては、同族繁殖系では問題もあると思います。例えば資料に『佐藤学が出ない』と刺激的に書きました。佐藤さんは一緒にいると人をうなずきマシンに変えてしまふマシンガントークの人です。でも追っ掛けがいます。追っ掛けがいるということは、

彼はアイドルです。筑波教育学者にアイドルはいますか。ご当地アイドルはいますか。

実は今日は茨城県の県立高校入試の日です。私は心配しつつ注目しています。過去に多くの採点ミスがありました。その問題でNHK水戸『イバ6』のインタビューを受けて、3回ぐらいリモートで出演しました。なぜ私だったのかというと、神奈川県で同じような採点ミスがあったときに私が調査委員長を務めたので、そのつながりだと思います。ともかくローカルニュースに出ました。今後はこのように社会に露出してアピールしていくためにも、専門的なサブテーマを持つことが社会的役割として重要だと思います。佐藤学さんがどうこうというわけではありません。賛否両論あるかもしれませんが、世代間の斜めの交流と仲間の輪を広げていく方向で、筑波教育学のこれからを描いてみてはいかがでしょうかという提案で終わります。ありがとうございます。

平井 田中先生、ありがとうございます。指定討論者、宮寺先生による発表者への質問、コメントをお願いいたします。発表された方、宮寺先生は前に移動してください。

指定討論

(宮寺 晃夫)

宮寺 教育学の「学問論」と「(研究)組織論」の二つに切り分けながら、3人の先生の報告に、コメントを加えさせていただきます。もちろん、後述のように、教育学の「学問論」と「組織論」は密接に関連しています。

まずクアニシ先生は、ご自身がカザフスタン出身の国費留学生であったという経歴と、げんざい教育学域の女性スタッフであるという立場をふまえて、筑波大学の教育学研究のあり方を論じています。論点はふたつありました。

ひとつは、筑波大学の教育学域が、さまざま

な母語の留学生と研究者を、どれだけ呼び込んできたかという問題です。クアニシ先生は、筑波大学の国際性と多様性のポリシーに呼応して、教育学域も、さまざまな地域から、多様な関心をもつ留学生と研究者を、日本語力の程度にかかわらず、もっと迎え入れるべきだとしたうえで、そのためには、英語による講義や指導の実施と、英語による発信に取り組む必要があると強調しています。

この提言は、とうぜん、これまで日本語でなされてきた（そしてそのことを留学生や研究者にも求めてきた）本学の教育学研究を、問い直すことにつながります。しかし、英語という国際共通語に置き換えればよい、というわけではありません。言語は伝達のツールであるばかりでなく、学問のコンテンツそのものでもあります。何語で考えるかは、思考の中身を規定します。ですから、複数の言語の間で考えることは重要で、それが研究を豊かにしてくれます。そうした教育学研究における「言語問題」と「翻訳問題」を、クアニシ先生の提言は示唆しているように受け止めました。

クアニシ先生が挙げたもうひとつの論点は、研究組織である学域が、女性の研究者にどれだけ配慮をしてきたか、ということです。これは、職場としての学域の働き方改革の問題ではありますが、それだけにとどまりません。教育学研究におけるジェンダー問題にもかかわりをもちます。

極端な例かもしれませんが、比較対照のため、宮寺自身が昔に経験した事例を引き合いに出してみます。

わたしは、いまから61年前、1961年に、東京教育大学教育学部教育学科に入学しました。同期生は35人、そのうち女子学生は1人でした。隣の心理学科が、半数近くを女子学生が占めていたのとは対照的です。これほどまでに、教育学科が女子の受験生に不人気だったのはなぜか。そんなことを意識することもなく、「教育学は男の学問」というバイアス

のかかった見方を、わたしは受け入れてしまいました。同期生には、別枠で東南アジア出身の女性の派遣学生もいましたが、1年後に帰国しています。また、これは特筆すべきことですが、教育学科に所属する先生がたは全員男性でした。これにも、わたしは疑いを抱くことはありませんでした。

クアニシ先生は、教育学研究の分野でも、内外を問わず、優秀な女性の研究者を積極的に迎え入れるべきだ、と強調していますが、研究者の男女比率の格差は、いまなお解消されていないのかもしれない。ただ、これは職場の「働き方改革」だけの課題ではありません。大学の研究環境が、働く女性にどれだけ配慮しているかという組織論とともに、男性中心につくり出された教育学に、ジェンダーの視点から組み替えを迫る学問論の課題でもあります。

今回の報告で、クアニシ先生はやや抑え気味の表現ですが、あらたにつくり出される教育学を、「優しく、たくましい教育学」として言及しています。ジェンダー論の視点からすると、大変示唆に富む学問論です。そこに込められた意図を、さらに詳しく展開していただきたいところです。

つぎは銀島先生の報告です。銀島先生は、これまで所属してこられた研究機関をたどりながら、ご自身の研究を時系列で振返っています。先生の研究は、筑波大学の自然学類で数学を専攻したときに始まります。その後、教育学研究科の学校教育学専攻に進まれて、研究を数学教育学へと移していかれました。「移した」という言い方は、しかし精確ではありません。数学と教育学の二つの分野にまたがる研究をするようになった、ということです。こうした複数の専門分野にまたがる研究をするということが、教科教育学の特徴であり、強みです。

さきほど、田中先生は報告のなかで、「もう一つの専門分野を持つ」ことの大切さを指摘していました。これは、どの専攻でも、教育学研究を進めるうえで大事なことです。こ

うした複数の専門領域にまたがる研究をするという特性は、教科教育学には本来的に備わっています。その教科教育学を、内部に位置づけているのが筑波大学の教育学域の特徴です。

筑波大学の前身校の東京教育大学は、1949年に大学設置基準法により創設されました。そのとき、教育学科は講座制をとっていました。その講座は、教育哲学、西洋教育史、日本教育史、教育社会学とつづき、11番目に社会科教育、12番目に人文科教育、最後の13番目に理数科教育となっていました。重要なのは、この13講座には上下関係はなく、横並びの関係にあり、その全体が「教育学」として括られていたことです。

教科教育学を専攻している人にとっては、教育学のほかにもう一つ専門領域を持つということは当たり前のことです。教科教育学は、複数の専門領域に軸足を置きながら、学問としての自立を図ってきました。銀島先生は、さらに学校の実践現場との関係も深めていきながら、研究を進めてきています。研究の成果を、実践現場の改革に活かしていくことにも、積極的に取り組んできています。研究と現場、この相互交流のなかで教育学のあらたな学問論をつくり出しています。これは、生涯学習政策研究部という研究組織に所属してきたからこそ、開かれてきた展望だと思えます。

もう一つは田中先生の報告です。田中先生は、ご自身の報告のなかで、教育学の学問論と組織論を同時に展開しています。先生は、みずからアウトサイダーだとしながらも、筑波大学になってこの50年間に、研究組織としての教育学域はアイデンティティを失ってしまったのではないかと疑問を投げかけています。それを取り戻すために、田中先生は、独特の表現ですが、研究者間の「縦の軸」、 「横の軸」、 「斜めの軸」から、研究を多角的に進めていくことが必要だ、と提言しています。要するに、閉じこもってはいけな、ということです。また、学域の構成員が、それ

それぞれ自身の研究史を、組織のあり方と重ね合わせてみていくことの重要性も指摘しています。これは、筑波大学が国際性と多様性のポリシーにより、研究の先進性を切り開くことに使命を課しているなかで、学域の構成員が、一人ひとり自律的な研究者として、自身の立ち位置を失わないように、との警句と受け取ることができます。

田中先生の啓発的な提言に触発されて、宮寺も、もう一つ軸を付け足したいと思います。それは「まえうしろの軸」です。要するに、現状を歴史のつながりのなかで見ていくという視点です。筑波大学の50年の教育学は、その前の50年、つまり東京教育大の教育学を引き継いでいます。ただ、引き継ぐといっても、実際には組織上のことだけで、学問論上の継承関係は、まだ封印されたままです。封印が解かれるまでは、筑波大学の教育学域のアイデンティティは宙吊りのままです。

私見ですが、東京教育大の教育学は、さらにその前の50年の高師・文理科大の教育学を受け継いでいます。それは、明治期以来の教育＝教授学の体系に、大正期の改革教育＝新教育の理念を上乗せして、ドイツの伝統的な教育概念で理論化していったものです。これが、戦前期まで「茗溪教育学」の学問論の枠組みをつくっていきました。

わたしたちが入学した当時、東京教育大学の教育学科には、そうした「茗溪教育学」の学問論を受け継ぐ先生がたも、少なからずおられました。その一方、入学したわたしたちには、つぎのようなテキストが必読書として指示されていました。それは、ルソー『エミール』、パスタロッチ『隠者の夕暮れ』、デュロイ『学校と社会』、梅根『新教育への道』、無着『山びこ学校』です。これらのテキストが、教育学科の会議室の書棚に並べられていたのを、いまでもはっきり覚えています。どういう経緯で、これらのテキストが選定されたのかは分かりませんが、当時の先生がたが、なにかしら教育学のあらたな「学問論」を模索

していたことの表れのように思います。茗溪教育学のパラダイムを乗り越えようとし、その意思をわたしたちに受け継がせようとしていた、とも受け取れます。

当時の必読書をそのまま受け継ぐのは、時代錯誤でしょう。それでも、仮にいま「筑波教育学」が学域単位で集合的アイデンティティを取り戻していこうとするなら、「まえうしろの軸」から差異化をはかることは避けられないことだと思います。そのなかから、これまでにない独自色を示していかなければなりません。これが、「三代目」としての義理の果たし方だと思います。

以上、3人の先生の報告にコメントを加えさせていただきました。その上で、さらに先生がたには、事前に宿題を出しておきましたので、お答えをいただきたいと思います。これは、発表内容に直接かかわるものではなく、いわば「発展的学習」のようなものです。

まず、クアニシ先生には、次の2つの宿題をお出ししました。近年の国際情勢はきわめて流動的です。特に、東欧諸国の国際紛争は深刻です。世界的な政治的危機の状況をにらむとき、筑波大学の比較・国際教育学はどのような課題を担うべきでしょうか。

学生の価値観は多様化し、学生間の基礎学力も格差を広げています。そのため、学生・院生一人ひとりへの個別対応にいつそう迫られていくと思います。しかし、そうしたなかで、比較・国際教育学は、学問としての水準と統一性をどのように確保していけばよいのでしょうか。

銀島先生には、次の2つの宿題をお出ししました。数学教育学は、代数学という専門分野と深くかかわりを持ちながらも、教育学の一部門と位置づけられています。教科教育と教育学、特に教育学の基礎部門との関係をどのように考えていますか。理系女子は少しずつ増えてきているようですが、それでも、大学での進学先となると、生物系や医学系に片

寄り、工学・物理系を選択するリケジョはわずかです。この傾向を根本的に改善するには、女子は文系、男子は理系という社会的風潮を変えなければなりません、それを待つてはいられません。小中学校の段階での算数・数学教育のあり方にも、改善の余地があるのではないですか。算数・数学教育自体に、ジェンダー・バイアスがありはしませんか。

田中先生にも、つぎの2つの宿題を出しています。わたし宮寺は、筑波大学に在職中、何度か先生の指導院生の学位論文の審査にたずさわりました。提出された論文には、基礎理論の分析に関する部分とともに、かならず、なんらかの調査研究がふくまれていました。そうした実証系の研究を課した理由について、おたずねします。また、筑波大学での研究者養成の強みと改善点について、お考えをお聞かせください。わたしからのコメントは、ひとまずここまでといたします。

平井 宮寺先生、ありがとうございます。組織論、学問論の両面から総括的なコメントをいただきました。これから引き続き発表者に応答していただきます。事前に発展学習の宿題が提示された話がありましたが、それを含めて10分ほどで、答えることができる範囲で応答をお願いします。後に全体討論が控えているので、そこに発展していくことも考えることができますが、まず、各自からコメントをお願いします。

宿題に対する応答

クアニシ 宮寺先生のコメントと質問に非常に考えさせられてしまいました。教育学域に女性研究者は確実に増えてきていますが、私が提案したのは女性を対象とした働き方改革というよりは、全ての先生がたのライフイベントを考慮した働き方改革です。今まで私たちはずっと公に出すべきものではない、まさにプライベートなものとして抱え、仕事に支障をきたさないように、周りに迷惑を掛けない

ように務めてきたと思います。でも、それは教員本人のメンタルヘルス、健康にとって非常に大きな負担です。自分にはライフイベントがあることを周りに話して理解していただき、仕事に携わります。さまざまなサポートをいただくことに遠慮しない考え方を、まずは教育学域の皆で共有していけるとよいと思います。

実際に私が言っていることについては、既に体制ができています。その体制をより大きく、より有効なものにしていくことが必要だと思います。例えば、保育園があります。5時以降の会議に出なくてもいいというダイバーシティ関係のルールもありますが、私たちは頑張ってしまう。会議にも出ます。入試にも出ます。さまざまな意味で、迷惑を掛けないことを中心に考えてしまうので、ライフワークバランスが崩れてしまい、その影響は研究にも及んでしまう現状があります。その観点からもう一回、皆で考える必要があると思って提案しました。

筑波教育学の学問の実態としてどのようになっていくかについてですが、この題は個人的には大き過ぎるので、今の時点でどのように答えればよいのか分かりません。私が思うのは、言語がツールであることは変わりありません。日本語もそうです。つまり、英語で日本の教育学を学ぶ意味でも、ツールとして考える必要があります。そして英語で教えることができる教育、あるいは研究する教育はどのようなものなのかについて、確かに私たちが教育学の課題として考える必要があると思います。現時点で私はこれしか答えることができません。

次に、いただいた宿題についてです。東欧で起きていることは、ロシアのウクライナへの侵攻のことだと思います。私自身が旧ソ連諸国の出身者としては、そのことをとても身近に感じています。旧社会主義体制の国同士の対立です。かつては皆が共有していた教育制度内容がありましたが、結局、それは何だったのかを考える必要があると思います。

比較・国際教育学として、そのようなテーマに関心を持ってもらうことももちろん大事です。私自身も自分の研究における基本的なところとして、かつての社会主義教育は何だったのか、今はそこからどのように変わって、なぜ変えることになって、あのような侵攻が起きてしまったのか、そのことも考えることが求められています。私自身はそれを宿題、課題として考えています。

次に、留学生への個別対応についてです。これは私自身もそうでしたが、ここにいる留学生もそうだと思います。留学生が研究テーマを選ぶときは、皆決まって自分の国を研究します。それはなぜなのか。皆さんも考えたことはあると思います。教育学を学ぶときに、まずは自分の国で受けてきた教育を知る、深く理解する必要があるということが前提にあると思います。そのため少なくとも修士論文の段階では、留学生のほとんどが自分の国を取り上げます。これは決して比較・国際教育学だけではなくて、他の研究室の先生方も直面している課題であると思います。指導教員としての自分は留学生の母語を言語が分かりません。例えば、読めない中国語の資料等を学生が調べて研究している上では、研究のインテグリティが問われます。問題の所在の正当性や方法論の妥当性、調査・データの信ぴょう性などについて、どのように私たちは指導教員として保証することができるかが常に大きな課題です。まさに言語的な限界があります。そのときは、学生を信用することしかありません。学生の研究姿勢を育てていき、それを信じるしかありません。すみません。現時点では、これ以上は私から申し上げることはできません。ただし5年、10年たってからもう一回先生にその話ができればよいと思います。

平井 クアニシ先生、ありがとうございました。銀島先生、お願いします。

銀島 教科教育と教育学、特に教育学の基礎部門との関係をどのように考えていますかという問いについてです。私の指導教官の能田先生は残念ながら既に他界されましたが、広島大学の教授でいらっしゃった平林一栄先生と一緒に研究会を開催なさっていました。平林先生は数学教育研究の博士号をわが国で初めて取得なさった方です。2007年に発表された平林一栄先生の論文で、数学教育学の居場所をいかに確立するか、学問領域として位置付けるか、が議論されています(平林2007)。学問としての数学教育学の存在が認められるまでにどのような経緯があり、どのような苦労があったのか、さらには、今後すべきことが述べられています。先ほど宮寺先生のお話の中で、東京教育大学では教育学科の13講座の一つに理数科教育が位置付けていたとうかがいました。平林先生や能田先生が奮闘努力なさった時代があり、今日があるのだと思います。

本題に戻りますと、教科教育学について、例えば数学教育学は数学という学問領域と密接に関連します。また、教科教育学の特殊性は、子どもの認識の発達を追究する学問と言えるかもしれません。例えば数学教育学では、量や空間、変化をどのように捉えるか等、数学の研究対象に関して、子どもの認識の発達や学習、指導を追究しようとするものだと思います。

女子学生の進路選択に関連して小中学校段階での算数・数学教育の在り方に改善の余地はありませんかというもう一つの問いについて、改善の余地はあると思います。ただし、小中学校の段階で配慮ができたとしても、その後の段階で社会的な要因が影響するのであれば、問題の解決にはつながりません。女性が理系の職業や研究領域を選択しても全く不自然でない、不利な状況が生じない、周囲を気にせずに自分のしたいことをして良いのだという雰囲気が必要のように思います。社会全体の意識を変えていくことが必要だと思います。

私が学部生や大学院生だった時代には、ジェンダーやハラスメントという考え方や用語も一般的ではなく、あまり意識されていなかったように思います。幸いなことに、私の指導教官の能田先生は男女の分け隔てなく指導してくださり、嫌な気持ちになることを言われたこともまったくありませんでした。振り返ってみて、それは大変有り難いことでした。心から感謝しています。

平井 田中先生、お願いします。

田中 ありがとうございます。これからの筑波教育学を考えたときに、何をコアに考えるかも一つ必要な視点だと思います。宮寺先生は歴史の軸が大切で、これを失うと現象に流されていくのではないかと指摘がありました。私も確かにそう思います。配布資料の最後に「まとめ」として三つほど書きました。私は教育学のコアは社会科学だと考えています。異論はあるかもしれませんが。科学研究費の分野枠で教育学は社会科学だと思います。人文科学ではありません。また人間科学の中で教育学は、心理学人気のあおりで苦戦を強いられる面があるので、コアのところでは経済学や歴史軸を含んだ社会科学的な視点をもっと取り込んでいってもよいと思います。資料下の三つ目に書いていますが、教育現象の持つマイクロ、メゾ、マクロという三つの位相を貫いて見通せるような目利きを育てていくことが、これからの教育学に必要な視点だと思います。

最近、読んで大変面白かった本は、イギリスの経済学者のスキデルスキー親子が書いた『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』（ちくま学芸文庫）という翻訳本です。良い暮らし、good life を、人間は忘れてしまったのではないかという論旨です。ケインズの予言では、ここまで貪欲になるはずではなかった、だからこそ「理念なき資本主義の末路」を考えてみなければいけないと指摘します。このようなマクロな視点は人間科学では出て来にくい

視点だと思います。歴史が主要軸になるかというところで考えれば、私は人間の自分史の軸中に社会科学的な視点を取り込むことが一つの行き方ではないかと考えます。マクロ・メゾ・マイクロをつないで考える視点が私の関心です。

イギリスで身を寄せた研究室にアイヴァー・グッドソンという著名な教育社会学者がいました。彼が日本で講演したときにこう言っていました。世界中で見られる教師のここ50年の大きな変化は、社会科学的な関心を全く失ってしまったことだということです。これは教師が社会への関心を失っていることの現れで、世界中のどこでも共通しており、危機感を持って見るべき現象だと指摘しました。彼は教師のライフヒストリーに取り組んでいる研究者ですが、エスノグラフィのようにマイクロの世界にだけ溺れてはいけないと日頃から言っていました。マイクロはマクロの反映でもありマクロの兆候でもある。マイクロの探究だけで閉じて終わってはもったいない。歴史の基軸が大事だと思いますが、それは社会科学的な視点として必要だという意味で最後に書きました。

最近ではデータサイエンティストが大変もてはやされています。皆が向こうに行くのであれば、逆にとことん「ケーススタディスト」を育てる方向も有望だと思います。最近の心理学の動向も質的研究に振れている気がします。英国在住の日本人女性、ブレイディみかこが書くルポもよく読みます。イギリスの「底辺託児所」シリーズの中で出てきますが、彼女は「地べたの視線」と書いています。そのような視線はケーススタディストでなければ出てきません。データアナリストではあまり出てきません。現象を地べたに根ざした視線でリアルに観て、それを社会科学的なマクロな視点で確認できるような研究者像を思い描いて、それを筑波教育学者の参考モデルにしていただきたいです。

お受けした質問に答えてみます。学位論文の中で調査研究論文はあまり評価されていな

い気がします。これは学会誌でもそうです。調査だと報告書という捉え方をされています。社会学の調査論文を見てもらうと分かりますが、何々が何パーセントという研究ではありません。現在ではケーススタディ法も含めて、多様な質的分析法を使っています。調査論文をもっと評価してほしいと感じています。なぜそこに理論を入れるのかというと、現象を見るときにそれをうまく説明できる概念の枠組みを持っていなければいけません。ただ現場に行けば何かが見えるだろうという感じで、当てずっぽうの研究ではほとんど論文にはまともりません。コアになる、核となるフレームワーク（枠組み）をしっかり持っておくことが調査研究では大事だと考えてきましたから、院生にもそれを薦めています。

筑波教育学の研究者養成での強みを一言で言えば、「面倒見が良い」ということです。この院生の論文はあの指導教員の先生が書いたのではないかと疑うぐらいに筆が入っているのです。文面にその先生の癖が出ている。これは一体誰の論文なのだと思うくらいです。おそらく〇〇大学の先生はそこまではしてくれない。筑波の先生は非常に面倒見が良いので大変忙しいのです。自己評価ではそこらをもっと高く評価してほしいと思います。

英語での発信についてです。今はお金さえ出せばネイティブチェックをしてもらえます。英作文は苦手かもしれませんが、何とかしてそこでいろいろとコメントを付けてもらってスキルアップしていけばよいです。大論文を書かなくても、まずはアブストラクトや、オンラインで発信していく辺りから進めてはどうかと思います。日本では英語を使わなくても生きていける国です。シンガポールや香港に行くと、英語を使わなければ生きていけません。日本はガラパゴスなので、大いにジャパニーズイングリッシュをはやらせて、大いなるジャパニーズイングリッシュ論文を広めましょう。ローマ字で書くわけにはいきませんが、英語論文を頑張って書いてほしいと思います。以上です。

平井 ありがとうございます。発表者から応答がありました。宮寺先生、コメントがあればお願いします。またこの後に全体でディスカッションを行います。既に整理されたと思いますが、あらためて論点の整理をお願いします。

宮寺 すでに充分回答していただいていますので、満足しています。3人の先生がたの報告について、フロアのかたがたが納得されたかどうか、また、さらにお聞きしたいことがあるかどうかを伺いたと思います。全体討論に任せたいと思います。

全体討議

清水 ありがとうございます。本日は3人の先生から、筑波教育学について話していただいたことを受けて、学問論と組織論、そしてその組み合わせによるアイデンティティーの枠組みの問題を整理いただいた後に、時間の軸のことも新しく考えておく必要があるのではないかという話がありました。これまでの議論を非常に簡潔にわかりやすく整理していただきました。これを受けて、本日参加されている先生方からご質問やご意見を受けます。どなたでも結構です。フロアのマイクがあるので、挙手をしてください。発表者へのご質問でも結構です。指定討論者の宮寺先生に対するご質問でも結構です。お願いします。いかがでしょうか。はい、磯田先生、お願いします。

磯田 午前中に会合が入ったので遅れました。懐かしいかたがたの顔を拝見しながら、昔にそのようなこともあったと感じながら伺いました。国際の問題について、教育学域の先生がたは非常に努力されています。司会をされている清水先生や浜田先生が新しいプログラムをつくっています。そのような形で努力されている状況にあると思います。田中統治先生がCRICED（教育開発国際協力研究セ

ンター)にかかると話題をお話下さいました。15年以上前に台湾の授業研究国際会議に呼ばれた際に、香港の教育学者から日本に教育学はあるのかと言われました。韓国、台湾は英語発信しているが日本は発信していないと言っていました。その後、随分と変わりました。教育方法学会でも授業研究関連の本を出しました。英語の著作を全体として作る動向があると思います。そのため昔話です。

21年前 CRICED が教育学系を基盤に作られた時代は、まさにその時代でした。当時は英語発信の方が国内全体で限定され、英語発信の追究が、英語発信されない方との乖離の背景となりました。以来、当時の管理職の皆様、大高先生や吉田先生等に相談しながら、教育学域との協働を模索しました。英語発信を求める人事制度後、管理職の方々の諸プログラム開発などの御苦勞を通して学域も変わりました。その中でぜひ先生がたに知っておいていただきたい話題です。先週、東南アジア教育大臣機構 SEAMEO と CRICED は年次国際シンポジウムを行いました。YouTube 上の視聴件数は4万件でした。昨年の場合、通年で視聴件数は11万件となりました。それとは別に、昨年より地理教育(井田系長)、IB教育(川口先生)、そして数学教育でオンラインコースを SEAMEO と協働して提供しています。登録受講者は5コース合計で38ヶ国1.5万人です。なぜそれほど注目されるかと言えば日本の質の高い教育への注目があります。茗溪の教育学が担ってきた学校教育に寄与する研究は社会貢献とみなされますが、むしろそこにこそ世界は注目しています。

この中で一つ大切にしたいことがあります。筑波大学教育学域の先生がたは、文部科学省内のキャリアデベロップメントや諸調査、学習指導要領編纂などで国家政策の中核を担われていますが、その活躍は黒子となっております。その成果も茗溪の教育学に数えるべきではないかと思ひます。そして、茗溪の教育学を海外へ宣伝する場として CRICED

を使つていただければ誠に有難く存じます。それが二つ目です。どちらかという二つ目は意見になりました。田中統治先生には、当時 CRICED がストラグルした時代に並々ならぬご配慮いただきました。持てる良いものを世界に宣伝していくことは、逆に外から見る茗溪教育学のアイデンティティーを示すことに通じると存じます。そこで、ぜひ、茗溪の教育学のかような国際性を海外展開していくか、その辺りについてお話を伺いたひです。

清水 田中先生、お願いします。

田中 すみません、その辺りがよく分かっていませんが、多分この辺りだろうということで答えます。第11回 SEAMEO です。私も注目しています。東南アジア教育大臣機構に対して、筑波大学がずっと発信しています。私たちが学系として応援してきましたが、発信という点でもう一つパンチが効いていない気がします。同じように JICA 筑波なども学系を挙げていろいろと取り組みました。例えば中南米教員養成機関の幹部研修も行いましたが、大学本部はそれを全く知りませんでした。これだけの国際協力を行ったのに大学内部では評価されなかつたので、私は非常に残念でした。その後、放送大学へ移った後に文科省の国際課から依頼されて、中南米の教員研修プログラムを行ったという実績で委員会に入りました。在日大使館、外務省、経済産業省を含むオールジャパン体制で、ブラジルを中心とした中南米の教育支援会議に呼ばれて報告もしました。学系の先生たちにはあるとき大変なご苦勞をかけました。しかるべき外部機関からはきちんと評価してもらっています。内部ではあのような感じでしたが、忘れられたわけではありません。教育学系論集に書いたプログラムの成果について、国際課の会議の場で発表してくださいと依頼されました。

呼び込む国際化という点で言うと、わざわざ出掛けていなくても、向こうから来て

らって国際交流の場を広げていくことについて、今度は帰国した後のネットワークとしてどのようなリンクを作っていくかです。教員派遣留学生の場合もそうですが、これが課題だと思います。人に付くネットワークはありますが、人がいなくなっても続くネットワークは難しい感じがします。参考までですが、広島大学の尚志会のホームページを試みに検索してみてください。韓国支部などの外国支部がたくさん載っています。ここまで作っているのかと驚きました。同窓会のネットワークという点では、茗溪会の輪が途絶えているような気がします。新たなネットワークを作っていくことが、ネットワークの遺産を相続させる意味でも、あるいはDNAを絶やさない意味でも望ましい方向だと考えます。答えになったかどうかは分かりませんが。

磯田 ありがとうございます。今、海外同窓会は本部国際室で組織化していますが、相対として教育学OB自身が限られる現状ではないでしょうか。宮寺先生は自分たちで新しいプロジェクトをつくってみなさいということで、CRICEDとしては、学域の先生方のお考えのもとで、さらにインパクトのあるプロジェクトができれば有難く存じます。ありがとうございます。

清水 ありがとうございます。先ほど銀島先生のスライドの中に、教育研修留学生プログラムでマイトリー先生の話が出てきました。銀島先生、何かコメントはありますか。急に振ってしまいました。

銀島 活躍されている方はたくさんいます。田中統治先生とずっと縁があるタイのマイトリー先生です。今はタイで大御所になっています。現地で授業研究の取り組みを広くつくられて活躍されている方はたくさんいます。先ほど田中先生が言われた中南米は、筑波大学附属小学校の先生がたも巻き込んで取り組んだものもあったと思います。

田中 これと関連します。タイのマイトリーさんは学位論文を英語で書いていたと思います。日本語では書けないので非常に苦労していました。確か英語で学位論文を書いた第1号と言ってもよいかと思います。しっかりと経験値はあります。他の研究者でも他の研究室の経験値をお互いに共有していけば良いと思います。あのかきは大高先生が主査を務められたと思います。常磐大学で以前、大高先生と会いたときに、「数学の免許を取っていてよかったよ」と実感を込めて言っておられました。これはサブテーマの話とも重なります。

清水 ありがとうございます。フロアからご質問を受けます。それを発表者に投げたいと思います。フロアの方からご質問等がありますか。よろしいですか。オンラインからいただいている質問がいくつかあるので、先生方からご回答をお願いします。まずはクアニシ先生への質問です。ウクライナの学生支援をしている中で、講義が日本語なので内容が分からないという声があります。どの組織も共通で抱えていると考えています。もちろん英語での講義の開講も一つの有益な手段だと考えますが、先生がたの負担面を鑑みると院生による留学生のサポートもあります。例えば英文のレジュメ作成、プレゼンテーションの英訳も可能だと思います。このようなサポートが留学生の内容理解、相互理解の深化、ひいては筑波教育学の魅力向上にもつながると考えました。このような支援の可能性について、先生の考えを聞かせてください、という質問です。これは教育基礎科学サブプログラムの院生のブラッドリー桜ミシェルさんからのご質問です。

クアニシ 教育学位プログラムでは国際教育サブプログラムがあります。そこでは英語オンリーで学んでいる学生たちがいて、彼らが修士論文を英語で書いている先行事例があります。そこから見ると、例えば、学生たちは発

表要旨を英語と日本語で書いて提出しています。そこで指導等に携わる先生方も、日本語の要旨を見ながら指導、サポートをしていると思います。英語が読めない先生はいないと思います。質問は日本語でしたい場合に、日本語と英語の両方ができる学生が通訳に入るような柔軟な対応は、私は十分可能だと思います。

清水 ありがとうございます。もう1件は田中統治先生に、附属学校の関係で質問がきているのでお答えください。先ほど時間の関係でスライドをスキップされたと思います。これは学校教育学専攻の太田さんからです。附属学校との共同研究を進める際のポイントを伺いたいということです。筑波大学には多くの附属学校があり、附属学校との連携が鍵であるように思うからということです。これについては田中統治先生をはじめ、教育学系の時代から附属学校との連携をいろいろと進めてきました。田中先生いかがでしょうか。

田中 スライドはありますが口頭でお答えします。附属の研究発表会の招待はがきが学系の事務室に置いてあって、このような発表会があるのだなど、私は遊びにいくつもりで行きました。そうすると先方の先生方が皆で驚いて、まさか来るとは思わなかったという感じでした。それで顔見知りになったことがきっかけでした。まずは附属学校の発表会を見に行っただろうかと思います。この前、2月に附属小学校の発表会をオンラインで聴きました。共同研究者というか助言者として来たのは唐木さんだけでした。少し残念です。もっと入ってほしい感じがしました。それから附属との研究を進める上では、共通の用語というか共通の概念を持つことが必要だと思います。実践家が使う言葉に「揺さぶり」や「自分崩し」などの独特の用語がありますが、それと学術用語とを絡めて、このようなことを表現したいのだろうと解釈を届かせないと、共同研究まではいかないというのが正直

なところですね。お互いに譲らないところは譲りませんから、必ず空洞はできるので、語り続けることが大事になります。こちら側の用語を無理強いするのではなくて、再解釈するスタンスで臨むことが必要だと思います。

ちなみにお茶の水女子大学の附属小学校の研究発表テーマは新領域の「哲学」だそうですね。小学校で哲学という領域を新しく開発しています。多分校長先生のルートだと思いますが、筑波大学附属小学校と比べて、向こうのほうが距離的に近いこともあって意思疎通を図ることができている印象を受けます。研究発表への招待状は事務所に掲示されていますし、今は各附属校のHPを見るところから仲間のパートナーシップをつくるのがよいと思います。附属の先生たちと仲良くなるとすぐに「ため口」になるのでその変化と間合いを楽しんでみてください。以上です。

清水 ありがとうございます。先ほど銀島先生のお話の中にも、学生時代に経験した「附属小学校ワールド」というお話がありました。何かコメントがあればお願いします。よろしいですか。もう1件、質問がフォームに届いているので紹介します。これはクアニシ先生に答えてもらうのがよいと思います。今後、筑波教育学の存続のためには、日本と世界のそれぞれの軸におけるウェブサイトの総点検が必要と考えています。実際に教育学学位プログラムのウェブサイトを改定、公開していますが、それでは不十分です。例えば具体的に申し上げますと、海外に向けた筑波教育学に関するコンテンツを開発することも必要ではありませんか。特に教科教育学ではこのような発信が未発達なので、院生としても意欲的に着手しなければいけないと思っています。これも教育基礎科学サブプログラムのブラッドリー桜ミシェルさんからいただいています。これは教育組織として対応するべき問題かと思っています。クアニシ先生、コメントがあればお願いします。

クアニシ 本学が行う IMAGINE THE FUTURE という留学生向けのフェアがあります。海外にいる高校生や学部生たちが教育学類のテーブルになかなか来ません。国際教育サブプログラムはIB教育があるので、人気があります。筑波教育学の英語での発信について、魅力が弱いのが現状だと思います。午前中に代理出席した国際戦略会議では Japan Virtual Campus があることが分かりました。そのウェブサイトアクセスしてみると、CRICED 発信の数学教育やIBの紹介など、5本のビデオがYouTubeで公開されています。私はそれを全く知りませんでした。そのような情報を私たちが学域で共有する必要があると思います。Japan Virtual Campus のようなものを活用することが重要です。私たちがコンテンツを作成して、アップロードしていくことが課題だと思うので、学生、院生の皆さんの協力をお願いしたいです。

清水 ありがとうございます。フロアの先生、院生からご質問やご意見があれば受けます。いかがでしょうか。どなたでも結構です。はい、菊地先生、お願いします。

菊地 人間系教育学域の菊地です。本日は懐かしい先生がたにお目にかかることができ非常にうれしく思っています。質問は2点です。1点はコメントになるかもしれませんが。1点目はクアニシ先生の発表についてです。筑波教育学の強みを生かした海外発信について、現時点で教育学域の強みにどのような可能性があるのかを考えていければ伺いたいです。2点目です。田中先生が第3の軸として出された自己評価のところで、私も非常に重要だと思っています。先生のレジюмеの中に資本主義の末路への対抗や、データサイエンティストと共生するところにもつながってくると思います。全てが数値化されて、評価されていく組織の中で、いかに質的な良さや成長をアピールしていくのかは、特に教育学にとって非常に重要なポイントだと考えています。普

段は通常業務に追われて、長期的な目線で考える時間ありません。本日は50年、100年というとても長いスパンで、今後の教育学域や筑波教育学の方向性を考える機会をいただいたということで、大変貴重な時間になっていると思います。田中先生は共生することを出していますが、私は取りあえず実行しなければ何も始まらないという気持ちもあり、共生しつつも独自の評価軸を持っていくのかについて、アイデアがあれば伺いたいです。以上です。

清水 ありがとうございます。1点目、クアニシ先生からお願いします。

クアニシ なぜ筑波教育学の出版物が必要だと思ったのかというと、東大などは出しているものを見て、私はなぜ筑波大学から出さないのかと思いました。東大などの出版物を見ると、概論的なものが多いです。高等教育、PISAの問題などです。筑波大学の場合は、より突っ込んだ、教科教育ならではの強み、教育原理ならではのところを書けると思います。そうすると、一般書の導入概論のような本ではなくて専門書です。筑波教育学から出せる日本の教育学の専門書として大きなものになります。百科事典ではありませんが、そのようなものにするのを考えることができます。より学際的なことも含めて、アプローチ等を考えて魅力的な本にできると思います。概論ではなくて専門書的なものにしたほうが良いと思います。

清水 田中先生、お願いします。

田中 ありがとうございます。尋ねられたところは、データサイエンティストと共生するところで、ケーススタディの方向性についてです。もう一つは自己評価をする場合の軸をどのように考えるかについてです。データサイエンスの内容は学ぶほうが良いと思います。統計学は分かっておいた方が良いでしょう。

私は学部のとときに統計学の授業を取らなかったの後悔しました。単なる数値だけれど数値の示す意味が分かることについて、大学院よりも学部のとときからしっかりと基礎に取り組んでおいた方がよいですね。それが分かった上でケーススタディ法を学ぶ方がよいでしょう。最初から質的な研究法から入って統計では駄目と思わないほうがいいです。自分で伸び代を掴むようなものです。データ分析ではやがてAIが乗り越えてくると思いますが、AIは既存のデータを読み込むだけの機械学習なので将来のことまでは分かりません。先のことを考えるのは人間でなければできないことです。ケーススタディによる実現可能性の予測については、現場に行ってじっくり観察してみれば分かります。

実は筑波教育学会をつくるときに、附属との共同研究を一つの狙いとしていました。筑波教育学会がなくなってこんなことを言うのはおこがましいのですが、実際のところ共同研究は難しいだろうと思っていました。附属との共同研究は望ましいけれど、できるだろうかと悩ましく考えていました。附小校長を務めていたので、附属の先生たちに入会してくださいと何度か職員会議で発言しましたが、入会者は管理職以外少なかったです。向こうの視点に立ってみると、入って何の役に立つのかと思います。メリットが分かりません。メリットを言うとすれば、将来は大学教員になるかもしれません。そのときに学会の業績がなければ駄目です。そのようなことを言わなければいけません、そこまで言いたくはありません。研究の動機で入会してほしいと思っていました。結局、筑波教育学会は発展的に解消されましたが、そのDNAはケーススタディ的な実践研究のところで受け継いでいただきたいです。これについては銀島さんも触れられました。

もう一つは自己評価の軸についてです。自己評価論を読むと、心理パラダイムでは必ず「メタ認知」論が出てきます。今や日本中が「評価疲れ」に陥っている原因の一つに、メ

タ認知論があるのではないかと危惧します。カリキュラム研究で有名な安彦忠彦先生は、むしろ自己評価力を育てることが教育の本質なのだと書いておられます。メタ認知論から入ってしまうと機械論的になる感じがします。振り返りに真剣に取り組んでみれば、自分が今はどの辺りにいるかは大体分かりそうなものです。間違えたら失敗から学べばよい。これからどうするべきなのかは分からないけれど、教育研究者であれば、少なくとも三つぐらいの選択肢は思いつくはずで。次回このようなパネルディスカッションを開くときには、三つほどの選択肢の中で議論すれば自己評価の軸も明確になると思います。そのために逃げ口ではありますが、評価という軸は斜めではなく縦・横・高さの立体的な図式の中で考えただけであれば幸いです。

清水 ありがとうございます。他はどうでしょうか。お願いします。

小島 小島です。既に発言する立場にないと思って聞いていましたが、これが最後になると思うので感想を述べます。私は2007年に定年退職をして、その後は京都の龍谷大学から月給をもらって、京都教育大学の教職大学院で8年間教員を務めてきました。教職大学院では非常に良い思い出しかありません。仕事をしながらこのような人生を送ることができました。月給は東京から比べると400万円ほど落ちましたが、やりがいとして非常に満足した生活を送ることができました。

私の研究では学校経営という大枠があり、そこでスクールリーダーをどのように育成するか、革新のスクールリーダーシップをどのように大学の教育として育成していけばいいのか、そのプログラムや制度や環境なりを考える研究をしてきました。ただし、実際にその場ではあまりものにはできませんでした。少しはあったと思います。そのようなことをいろいろと取り組んできました。当然、筑波教育学または卒業生はどのような仕事をし

て、しかも影響力を持った仕事をしているかが気になります。そのようなことがあり、自分自身に跳ね返ってくる問題でした。

私はどちらかというと現実的、政策的な問題について、私なりの考え方とそれなりのクリティカル感を足しながら話を組み立ててきました。欠けていたものを分かりやすく言えば哲学、社会観、世界観、人間観、人間像、世界像、社会像、そのような思想的・哲学的な観点、視野でした。最近はそのような研究を少しずつしてみようと思いました。筑波大学の卒業生は、どのような研究者がどのような仕事をしているのかについてです。例えばアーレントという人がいます。先ほど名前が出ていました。田中さん、アーレントでいいですか。

宮寺 はい。

小島 これは宮寺先生ですか。

宮寺 そうです。

小島 労働、活動というキーワードを出して説明されました。その訳本を出した比較・国際教育学の橋本先生がいます。あとは九州大学から来た方がいます。名前を忘れてしまいました。彼らは非常に良い訳本を出していました。ただし、私はそのときにあまり知らなかったもので、橋本さんたちに長い書評、感想を書きました。ただし、私の観点が遅れていると思います。その後いろいろなと勉強してみると、彼女の存在を巡る政治的なことなど、さまざまなことが出てきました。その中で私の研究や教育学はどのようになるのか、どのように考えればいいのか、そのようなことを真面目に考えるようになってきました。

私が学生時代に資本論をよく勉強しました。実は教育学を全く勉強しませんでした。資本論やマルクス経済学の授業を取りましたが、われわれの時代はたばこをふかしながらマルクス経済学批判の授業を行う先生がいま

した。非常に自由な雰囲気があって、そのような勉強をしていました。ただし、ずっと30、40年間でそのような関心はなくなり、仕事はしてきませんでした。ただし、私が教育学を考える根本に、または教師教育学を考える根本に、資本論の文脈というよりはポイント、観点です。または断片的な知識が根にあります。例えば産業革命で資本主義社会が出てくると、イノベーションがたくさんあります。それで労働者が多能労働的なものになります。当然、教育もそうなることができました。そのようなことがずっと何十年間も頭にありました。そのため私は教員が多能労働者であるとずっと考えていました。

最近、斎藤幸平さんという資本論の研究をしている人がいます。大阪市立大学の若手でしたが、東京大学の准教授になりました。あの人のコモンズについてです。要するに資本論の核心は、新しい社会をつくっていくことです。コモンズの存在、観点が大事です。そのようなことを言って、30万部売れました。そのように勉強をしている間に、教育や医療はどのような仕事、職業なのかと考えます。宇沢弘文という経済学者がいます。2014年に亡くなられました。その方の本をずっと読んでいくと、社会的共通資本という概念があります。それは今の教育の問題、教育学の在り方を考える際にとっても重要です。私が学校経営でそれについて考えると、学校経営政策という観点から研究をするべきだと思いました。政策または人材がどのようにつくられていくのかと思い、経済学の断片を読んでいます。

本日は宮寺先生の話がありました。そして田中先生は面白いというか、田中先生は素晴らしいと思います。私は筑波大学に来てもらって非常に良かったと思っています。そのような先生が続々と増えていくことを私は期待したいです。私は最近、ある院生の本を読みました。院生の本を読んで論じ方について思いました。日本の教育学は、最高の研究の域に達していると感じました。それを読んで

非常に心強く思っています。そのような院生がこれからも次々と育つようにすることです。しかも、それは田中先生が言っていた社会科学などへの視野の広さです。ある小さなことの中に、大きな世界を見て生きていくことです。そこから変革して有用なものをつくり出すことです。そのような教育学研究というか、在り方が必要になってきます。そのようなものが少しずつ筑波教育学に出てくることです。昨今の社会正義と省察の観点から教育改革の必要があるという観点が出されるようにです。筑波教育学の中の研究者として、どのように評価されるのが非常に楽しみにしています。以上です。

清水 小島先生、ありがとうございました。興味深くお話を伺いました。先ほど宮寺先生が提示された時間軸があります。過去を鏡にして現在を見るという観点を、あらためて言及していただいたと受け取りました。ありがとうございました。時間が押してきました。もう1点、本日の議論の中で、「国際」というキーワードがよく出てきます。現在、私たち教育学域の教員は、研究成果を英語で発表しなければいけません。それから大学院生の人たちも国際会議で発表します。その中で、筑波大学がずっと大事にしてきた教育学の部分を、英語で発信しなければいけない外圧のようなものに押されている部分があると思います。その辺りも大事な論点だと思いました。宮寺先生からもそのような指摘をいただいています。教育学の研究を英語で発信していくことについて、意見があればいただきたいです。どうですか。真ん中にある浜田先生にコメントをしてもらおうと思っていました。浜田先生、どうでしょうか。

浜田 私自身は英語で論文を書いて発信したほうではないので、なかなか今の問いは難しい点です。私が大学院の専攻長という立場に立たせていただいて以降、私自身の仕事のメインは学域や大学院の国際化を推進すること

に、結果的になっています。実は昨日タイから帰ってきたばかりです。中国、韓国、タイという国は、私にとって全く未知の国でしたが、今は本当に日常的にそのような国々のかたがたと親しく交流するようになってきました。これは私自身の研究の必要性とは違い、組織としてそのようなことをしなければならぬことから出発しています。同時に研究成果を英語で発表することについて、完全に私たちはそうしなければこの大学では生きていけなくなってしまっています。

私は良い面と悪い面の両方があると思っています。多分、本日コメントいただいた宮寺先生や先ほど発言いただいた小島先生という、東京教育大学のまさしく教育学の本流でずっと仕事をしてきた先生がたにとっては、自身の論を英語で発信しなければいけないことについて、失礼ながら全く考えたことがなかったと思います。この時期になって自身が過去に書いてきたことを英語で発信できるかです。最近は翻訳ソフトもあります。業者に頼めばすぐに翻訳してくれます。ただし、それで事が足りるかということ、私は全くそう思いません。これは教育学の特徴だとも思います。人文社会系の研究の特徴でもあります。母国語で議論していることの必然性、あるいは不可欠性があります。簡単に外国語でそのまま右から左へ翻訳するのでは済まない部分があります。逆に英語を読んでいて、日本語に翻訳しようとしたときの難しさは皆さんも感じたことがあると思います。それ以上に学問の世界で、英語圏で基本的な論文作法とされている事柄と、日本の学界でこれまで蓄積されてきた論文作法は非常に違うと思っています。

私は立場上、院生に英語の論文を必ず書きなさいと言っており、先生がたにもそうしていただきたいと思っています。ただし、簡単に英語論文を書くことによって失われてしまうようなことが、私は確実にあり得ると思っています。それが失われないように、日本語での議論をしっかりとできる力を持って、英

語で発信をしなければいけないと私自身は思っています。立場上、言わなければいけないことと、自分がしなければいけないと思っ
ていることとズレがあることを伝えます。でも、世界に対して日本の教育実態や、日本の教育学の奥深さのようなものを発信することが、これから必要とされると思っています。

あともう一つです。これまでの議論を私自身が考えてきたことに引きつけてみます。何げなく筑波大学の教育学類にいる人や、教育学学位プログラムにいる人たちは気付かないと思いますが、日本国内の教育学において筑波大学の一番の特徴と言えるのは、各教科の教育学と教育哲学、教育史から学校経営までの教育学の分野が、一つの組織の中にしっかりとあることです。大学院で学ぶときに教科教育学を学びながら学校経営学も学べます。教育哲学も学べます。実はこのような組織はありません。私はこれが筑波大学の強みだと思っています。

先ほど東京教育大学時代の数学教育学が認知されるまでの苦労の話もありましたが、そのような成り立ちを経て、いまや私たちにとっては当然のことです。旧教育研究科、今は次世代学校教育創生サブプログラムです。そこがしっかりと一緒にできるのは、日本全国にもなかなかありません。私は教員養成系の大学に勤めていましたが、教員養成系の大学で数学教育の研究者は、われわれ教育学の中にいる研究者とは全く違うところにいます。私は清水美憲先生と同じ時期に東京学芸大学にいましたが、ほとんど会ったことがありません。そのような感じです。でも、一つの教育学の中で、お互いが存在していることを共通理解できるのは筑波大学の強みだと思えます。例えば旧帝国大学の大学院では、そのような認識はまず育ちません。でも、私たちが取り組んでいる仕事では、二つの異なる領域という話もありましたが、そのようなものが必ずつながりながら実践が存在しています。自分が育ってくる環境の中で、私はそのことを自然に認識できてきました。それはこ

れからも絶対に絶やしてはいけないことだと思えます。以上です。

清水 急な振りに答えていただきありがとうございます。この後に先生がたから一言ずつ言っ
ていただき総括とします。順番が逆になってしまいますが、このタイミングで宮寺先生に少しコメントをいただきます。最後に発表者から1、2分で今後の期待等を述べていただき、会を閉じていきたいと思えます。宮寺先生、お願いします。

宮寺 わたしは、3人の先生の提案を、組織論、学問論に切り分けて整理してみました。その理由は今回のパネルディスカッションの主題（「これからの筑波教育学を考える」）が両義的で、問われているのが、教育学域の生き残り策なのか、筑波教育学のアイデンティティなのか、はっきりしなかったからです。おそらく、この両方だろうと推測しましたが、まずは論点を切り分けてみました。

パネルディスカッションの趣旨説明には、教育の実践現場が、「一人一台の端末導入に象徴されるように、教員・教職の在り方自体が問い直される状況」にあり、筑波大学での教育学域の立場も、予算配分等で「厳しさ」を増してきている、とあります。この現状認識を受けて、提案者の先生がたは、それぞれの立場から、有意義な提言をしてくださったように思えます。その後の討論でも、フロアからさまざまな建設的な意見が出され、提案者からも応答がなされました。なかでも、英語による研究発信や、実践現場との交流によって、筑波教育学のプレゼンスをもっと高めていくべきだ、との意見は印象的でした。

ただ、プレゼンスを高めるためには、学域の構成員が、それぞれのエグジステンスを賭けて、研究に取り組んでいることが前提です。率直に言えば、研究の成果を単著として公刊していくことです。それが、外部への何よりの発信になります。その積み上げがアーカイブとなって、筑波教育学のアイデンティ

ティにつながっていきます。集合的アイデンティティは、一朝一夕で築かれるものではないからです。

教育学域の現役の先生がたの奮起、ご活躍を期待します。

清水 宮寺先生、ありがとうございました。クアニシ先生から順番に、最後は田中先生でお願いしようと思っております。

クアニシ 私は最後がいいと思います。田中先生からお願いします。すみません。

田中 私は自己評価を自己都合で自信をつけるために取り組んでほしいと思います。その点から筑波教育学を見ると、日本教育学会を筑波大学で開催できたのはとても大きいです。私は組織としての業績だと感じています。震災の後に学会を開催してくださいと何度か頼まれましたが、筑波大学はまだ大震災の傷跡が残っていました。大震災といえはあの前日のペスタロッツ祭で高倉翔先生に講演いただきました。翌日は筑波教育学会を附属坂戸高校で開く予定でしたが、とてもそれどころではありませんでした。私は大震災のときに学系長を務めていたので、建物を含めて完全復興には10年以上はかかりそうだなと思いました。10年もかからずに日本教育学会の大会を引き受けてオンラインも含めて開催された組織力を自信の一つに加えてもらいたいです。

英語論文のことで言えば、日本教育学会の『教育学研究』には英語版があります。確かあれは宮寺先生が編集委員長を務めていらしたときに創刊されました。日本の教育学者はもっと海外配信をしなければいけないというので、宮寺先生の意気込みで作られた英語版です。英語力があれば単著で、足りなければ共著でよいので投稿してみしてほしいです。確かに英語にしてみると、いろいろと伝わらない文章があります。私もこの前英文アブストラクトをネイティブチェックしてもらって、

「なぜ通じないのだろうか」と思える箇所が朱書きのコメントで返ってきました。恥ずかしながら、専門外のネイティブの方から読むとこうなのかと考え直しました。これまで赤ペンは他人の論文に入れてきたので、久しぶりに自分が赤ペンを入れられるとこのような気持ちになるものかと思いました。それこそメタ認知、メタ評価ができました。スキルアップのチャンスにもなると思うので英語版にもチャレンジしてみてください。ありがとうございました。

銀島 強みの認識や魅力の発信が大切ではないかと申し上げましたが、本日の議論を通して、自信を持てる場所が見つかったように思います。自己評価の軸という田中統治先生の御提案には私も賛成です。より良くするために、より高めるために自己評価を行うのだと思います。もちろん、ここができないという認識も必要で、それに取り組むからこそ成長していくのだと思います。そして、これはできていると認識することで、次に取り組んでみようという意欲につながる、そうしたことが大切だと思います。本日の議論を通して強みを見いだすことができたように思います。

今回、貴重な振り返りの機会をいただきました。ありがとうございました。

クアニシ 私は宮寺先生の最後のコメントに、つくづくいろいろと考えさせられました。一人一人の研究がとても大事で、単著で出せるような研究の深さと広さについてつねに考える大事です。それを磨き上げることに集中しなければならぬという指摘はごもっともで、そのようにしたいです。現状では、共同研究などでさまざまな科学研究費の事業に参加しているときは、そこを優先しています。迷惑を掛けないようにするので、単著が後回しになってしまうのも現状です。そこをどのようにすればよいかは、自分自身の課題として本日のペスタロッツから持ち帰りたいと思

います。

もう1点あります。先ほど私が付け加えるのを忘れてしまったことです。留学生の指導についてです。留学生が自国の研究をするときに、その研究成果がどこの教育学への貢献になるのかを私は常に意識しています。例えば、日本の大学において日本語で書いているカザフスタンの教育については、日本の教育学への貢献になると思います。でも、自分自身も思うことですが、本人が自分の国の教育を深く、たくさん掘り下げて研究できたという意味では、本人自身が自分の国の教育を考える上でも大きな貢献になっていると思います。そのような筑波大学での留学生の指導も考えていきたいです。つまり、両方の国の教育学に貢献できるような研究を指導できるように、もちろん自分も発信できるように頑張りたいと思いました。本当に有意義な機会をいただきありがとうございました。

清水 ありがとうございました。司会進行がま
ずく、本来は休憩時間が予定されていたところまで議論が伸びてしまったことをお許しく
ださい。申し訳ありません。この後の進行は
実行委員会の先生方と相談して、開始時間の
調整をお願いしたいと思います。本日は4人
のパネリストに、非常に興味深い話と的確な
論点の整理をいただきました。これからずっ
と続いていくアイデンティティーの探求、筑
波教育学についての問いを考えていく大事な
機会が得られましたことに感謝したいと思います。
会場に来ていただいた皆様、オンライン
で参加していただいた皆様にあらためて感
謝を申し上げますとともに、発表いただいた4
人のパネリストに、もう一度盛大な拍手をお
願いします。ありがとうございました。

(了)